

セルゲイ・ネチャールエフの貫録(下)

平岡正明

しかしここでわれわれは農奴解放から露帝暗殺までの二〇年間に
おける暗殺の年表をとりまとめてみよう。

一八六六年四月四日——カラコゾフ、露帝アレクサンドルⅡ狙
撃。単独行。失敗。

一八六九年十一月二日——ネチャールエフ、イワノフを殺害。

一八七六年五月——ディチ、キエフ・ブントリ党内の密告者ニコ
ライ・ゴリノヴィッチを刺殺。

一八七八年一月二四日——ヴェラ・ザスリツチ、ペテルブルク
警視総監トレポフ將軍を狙撃。重傷をあたえる。この年人民の意志
党結成され、暗殺ラッシュ展開さる。

同年四月二日——キエフ大学総長マトヴェイエフ暗殺。

同年四月五日——憲兵将校ヘイキング刺さる。重傷。

同年八月十四日——ステプニャーク、秘密警察長官メゼンツェフ
刺殺。

一八七九年二月——ゴールデンベルグ、枢密官クロボトキン公爵
射殺。

同年三月——憲兵連隊長クヌープ射殺。於オデッサ。

同年三月——警察官レインステイン射殺。於モスクワ。

同年四月——アルハンゲリスク警察長官ピエトロフスキー暗殺。

同年四月——キエフ市長チェルトコフ襲わる。

同年四月二日——人民の意志党員ソロヴィヨフ、第一回露帝暗
殺に行動す。失敗。以後、党の活動はアレクサンドルⅡに集中攻
撃。

暗殺計画No. 2——同年十一月。オデッサにおける列車転覆。失
敗。

暗殺計画No. 3——同年十一月十九日。ハートマンとチリヤーエフ、
モスクワにおいて列車爆破。失敗。

暗殺計画No. 4——一八八〇年二月五日。ステパン・カルトウー
リン、冬宮に潜入し露帝一族の食堂を爆破。失敗。

暗殺計画No. 5——同年六月。クリミア途上、オデッサで待伏せす
るが、露帝旅行を中止。失敗。

暗殺計画No. 6——同年八月十八日。ジュリアポフ、於ペテルブル

ク、カーメスイ橋に爆弾をしかける。失敗。

暗殺計画No. 7——一八八一年三月一日の日曜日。於モスクワ。ジ
ュリアポフ、ソフィア・ペロフスカヤ、キバルツィツチ、リサコ
フ、グリネベツスキー等、練兵場へ行く露帝に爆弾をなげつける。
しとめる。

壇谷雄高の事実誤認を指摘することはやさしい。難波大助的なカ
ラコゾフの単独行をのぞけば、暗殺の標的は、横から、下からは
じまって、頂点露帝への集中攻撃をもっておわっている。人民の意
志党が結成される前後から、暗殺未遂、同志の奪回・救出、逮捕に
対する武装抵抗、党の印刷所を守るための銃撃戦といったものな
ら、無数にあるのだ。しかしテロリズムの終熄は露帝暗殺をもつ
て、一連の事件としておわったのではなく、ロシア革命運動史上の
主要な一表現としてのテロリズムが、その後レーニンの兄等による
Ⅲ世暗殺計画はあったが、おわるのである。すでに暗殺ラッシュの
二年はど前から、小規模ながら最初の政治的デモと(七六年十二
月)最初のストライキ(七七年一月)があらわれてきている。労働
者階級の登場は展望を一九〇五年までつなぐものである。だから年
表にめめされた暗殺は、ロシアにおける赤色テラーの、思想的・論
理的な容器であり、テロリズム思想の一サイクルをあらわす現実値
だといっている。このように指摘するだけなら容易である。だが赤
色テロが、横から、下からはじまっていった理由はなんだろうか？
壇谷雄高の理解とは異なって、革命運動の内部のかたちが、複雑な
ものから単純なものへと対立が煮つまっていったことをしめしてい
る。ヴェラ・フィゲネルの次の回想はこの事情を語るものである。
「彼の下僕たちの専横をおさえようという企てにたいして、そのた

びごとにツァーリはかえって反動の強化と弾圧でこたえた。主人の

意志を実行している下僕を打ってその主人には手をふれないでい
るということはおかしいことである。政治的暗殺がツァーリ暗殺にた
ちいるのは避けがたいことであった。」たんに文書を後代において
読むにすぎないわれわれにしても、ひとたびはじまってからの狂熱
的な当時の情況と、弔合戦の様相と、言うを俟たない権力のえげつ
なさから、やらねえはうがばかだ、という感覚にみちびかれる。標
的と肉眼のうえで決着をつけるテロリストの心理に身をおいてみれ
ば、かれらにテロを決意させた地点が、革命家の地べたにはいつくば
らされた自尊心といったようなものである、と納得させられるのだ。
むしろ、肉眼でとらえられる権力の像が、仲間を売った寝返り者か
ら露帝にまで抽象されていった過程は、テロリストの強靱な精神を
語るものであり、また正当である。松田政男の指摘では、従来の歴
史は、ナロードニズムからテロリズムへの転回の因を支配の苛烈さ
のみにとめ、転回の主体的要因なしでまかせてきたのが、俺はこ
れを補足するに、テロリズムをやむをえざる手段とみなす見解もま
た、革命史の主体的要因に対して消極的な理解だと言おう。ロシア
ではテロリズムは高きついた。ロシアにおいて、左翼による政治的
暗殺は有効だったばかりでなく、正当であり、革命運動の質的飛躍
にとって回天の事業であったと言っている。ネチャールエフをおとし
めた史観は、また赤色テラーをもおとしめている。赤色テロの五年
間を経ずには、ロシアの運動はもっと複雑であり、もっと悲惨であ
り、もっと曖昧なものになったにちがいない。俺にしてロシアにあ
らわれた美学としての暗殺の体系を語らしめれば、公斗としての権
力者暗殺が階級対立の複雑な相に沿ってしだいに権力下向をたど

り、ついに党内テロにぶつかるとは、逆に、私闘を公闘の領域に転化させながら、階級対立の複雑な相を基本的な対立にまで抽象し、権力をその人格的標的のもとに洗いだして一撃をくわえるプロセスのことである。極端に言えば暗殺の体系は党内テロにおわるのではなくそこからはじまるのである。まったく美学的な運動だ、テロリズムは敵のかたちを容赦ないまでにはつきりさせた。一九〇五年にいたる前段での決定的な準備、すなわち革命を土着させる試みは、赤色テラーによってなされたのである。潜在的——顕現的な露帝崇拜が人民的規模で消滅し、顕現的——潜在的な憎悪が人民的な規模で帝制にむかう段階をもって、土着は大きく変化し、革命が土着化されたとみていい。下民における権力観のこの回天は、ロシアにあつてはさいわいなことに、革命家たちの努力と呼応したのである。ネチャエフの時代、農民は露帝を救世主あつかいにし、農奴解放をさまたげる悪役は貴族であり、露帝に反向インテリゲンツィヤ、自由主義者、学生もまた自分たちの敵だと考えた。この事情は、反資本制・容天皇という、一面では素朴な、支配形態としては絶妙な、農民の日本の姿と近似している。ナロードニキが農民の消極的中立をつくりだすことに成功している。もしこの段階で革命家たちが停滞していたならば、ロシアの運命は戦前の日本のように、曖昧で悲惨なものになったかも知れない。ロシア的な超国家主義、ラスピーチンやガボンの方が案出され、一九〇五年の「血の日曜日」は、顕在的露帝崇拜から潜在的帝制反対の方向へもどらず、革命反対の方向が農民の心に潜んでいったかも知れない。しかし露帝暗殺は、フィグネルの証言によれば、次のような決定打を農民にあたえたのである。「……皇帝の殺害とこの殺害の動機について、農

民の頭は根底からかきみだされて、一所懸命思索することになった。二通りの答えが出てくるのははなはだしかった。一つは人民に土地をえさせ、人民を役人たちの抑圧から解放しようとのぞむ社会主義者がツァーリを殺したのだとするもの。もう一つはツァーリに反抗して一揆をおこしたのは自分の権利をまもうとする旦那方、地主たちで、ツァーリを殺したのは農奴解放が原因で、農奴制度の復活を期待してやったのだというものである。」最初の場合は人民の利害と革命家とが一致する。「党は十年間にわたる、ことばによる宣伝ではえられなかった支持を、大衆のなかにちかえたわけである。」第二の場合は、「有産階級に対する敵意の表現であり」革命家は人民の憤激の爆発に方向をあたえればいい。「どちらの場合も、革命斗争と人民との同盟ということが三月一日によってひらかれた展望であった。」——ヴェラ・フィグネル「ロシアの夜」

革命斗争と人民との同盟、ネチャエフにはこれがなかった。ナロードニキには革命斗争の方がなかった。革命運動の回天は、人民を味方にするための一語につきしたが、この一ことのために、革命家は人民のなかに投影された逆ツァーリズムをひとつひとつひっくりかえして、敵ツァーリズムとして対立を明確にさせてゆく精神の長征を必要とするのだ。同志殺しからはじまり露帝暗殺に上向集約するテロリズムは、この精神の長征の近似値をはじきだすくらいにスケールをもっていた。これはインテリゲンツィヤの不幸な歴史的ひとこまではなく、革命家の光栄ある事業である。

かくのごとく、赤色テラーの内証は、およそカミュ的な世界ではないのだ。ロープシンの「蒼ざめた馬」を読んでいるので、ここで断言することはさしひかえるが、たぶん、人民の意志党の立場

は、ネチャエフほど強烈な土着性と下民の色彩をもってはいないが、絶望した貴族青年の反抗や、陰険で詩人ムードいっぱい印象とおよそかけはなれたものだったにちがいない。テロリストの認識と綱領的理論を評価することは本稿の任ではないが、フィグネルの「ロシアの夜」にそいながら、短かく展望しておく。

かれらはロシアのブルジョワの無力を認識して反帝制のスローガンが、労働者、農民の利害を盛りこみ、ブルジョワ革命の要求と人民権力の要求とを統一させることを見抜いた。「西ヨーロッパにおいては政府はすでに支配を達成した有産階級の道具であり、その意志の代表者であるが、わが国の政府は独立した力であり、ある程度有産階級を生みだす源泉、創造者である。」ここにおいてかれらはロシアの後進性の根底において、それを利用する道を発見した。

人民の意志党はテロ専門部隊にあらず。「テロルそのものが党の目的であったことはけつてなかった。テロルは防衛、自衛の手段であつて、煽動の強力な手段であり、組織的な目的の達成が考えられていたかぎりでは用いられたにすぎない。」

かれらは、陰謀家の方策としてのみ考えられていた政治斗争、権力斗争のイメージを、プロレタリア独裁論にかえるための過度をなした。「一八七八年——一八七九年には、敵の中心部への『打撃』の政策がもっとも重視され、第一義的なものとなった。まさにこれこそが（ナロードニチェストヴォののぞんだところの）人民のいきいきした力をときはなつものと考えられた。政府が組織を破壊され混乱した瞬間にこそ、人民の力の発現は可能になる。今後は党の全力をかけたむけ、この瞬間をつくりだすために、あらゆる努力をしなければならぬ。」これはアレクサンドル・ミハイロフの理論であ

る。かれらは陰謀家と革命家の基準をうちだしつつあった。「政治斗争を行ない、革命運動の重心を農村から都市へうつす。人民のなかで烽起を準備するのではなく、最高権力にたいして、それを自分たちの手中にうばい、人民にひきわたすことを目的として、陰謀を準備する。中央集権化された敵とたたかいて勝利するための必要條件は、革命勢力をもつとも厳格な中央集権化することである。」これだけでも十分に非レーニンのな外部注入論者、インテリ野郎がインテリ社会主義理論を愚民に教えてやる、せせら笑いがこぼれないように上を向いて歩く裏返しにナロードニキよりも立派だ。

かれらは軍を工作した。かれらはクロンシュタットの海軍士官とペテルブルク砲兵隊士官の組織をつくった。「……専制との武力斗争にそなえて軍隊そのもののなかに革命的分子を系統的に蓄積するという形をとらねばならない……」軍への工作はつねに重要であり、それがいかなる時代であれ、また革命家にしろ反動家にしろ、軍へのはたらきかけが日程にのぼった時、かれらの機は相当に熟したと一般的にみなしている。遠くはスバルタクス、近代革命の初発の地点では国民軍の形成とバブーフの乱、近代クーデタの幕開きとしてナポレオン、後進地域ではインドのセポイの乱と中国のゲリラ、パリ・コミューンとプロレタリア民兵、日本では超国家主義と陸軍、等。人民の意志党が士官級に働きかけたことはかれらの革命論の性格をしめすものだといい。將軍はつねに象徴と黒幕、佐官クラスはクーデタの立役者、粹な小尉さんなら義勇軍がおにあり、伍長、軍曹でこりゃ革命だ、いつでも、どこでも兵隊さんは弾よけ、とこく。

政治的デモやストライキが労働者階級とともに登場する八〇年代

になって、テロリズムは古い形態であるとする意見は、赤色テラーの組織的実質、人民の意志党の活動と理論にてらしてみるとき、あきらかにあまりである。またカナックが、テロリストたちに思想的にはロシア自由主義者の鬼子と言うことはまちがってはいないが、かれらが権力機構を破壊したのちロシアの政治形態をどうするかというプランをもたず、もって立憲君主制にとどまっていたと書くのはあまりである。カナックには一番いい政治形態は議会制民主主義だということがわかっていらしいが、もうちょっといい民主主義がプロレタリア独裁だということが、どうもわからないらしい。われわれは、ネチャーエフ——トカチョフ——ミハイロフ——レーニンとたどるときに、下民における権力像がプロレタリア独裁論として思想化されてゆく様子を見ることが出来る。ロシア資本家階級の無力を洞察した一点で、人民の意志党の理論はすでにボルシェヴィズムを予想させる。メンシェヴィズム的なスターリン史観によれば、人民の意志党でなく黒色再分割派を革命の本流としてきたが、それはむしろメンシェヴィズムの源流として評価するべきであろう。プロレタリア独裁論の中心事項、国家論と組織論において、人民の意志党はボルシェヴィズムに近い。ただかれらは大衆のストライキや、経済的諸問題、自然発生的な大衆の蜂起、国際的な連帯といった問題に直面しなかったのである。ひとたびテロが開始され、赤色テロと白色テロが競走をはじめようになれば、そこには独特の内的理論と形態が問題となるが、しかし、以上の人民の意志党にかんする概算をもつても、テロリストの前にカリーエフIIカミユの暗殺の美学がどのような意味をもつかを推定できる。それはおそすぎた悟達であるのみならず、邪魔者あつかいをされるだらう。

「眼をつぶしたら眼をさしあげるという君の理論で、われわれを殺人者の汚名から救ってくれるというのはうれしいが、われわれに助け舟を出してくれるなら、ひとつ、ツァーリのこんどの旅行の情報をさぐってきてくれないか」とテロリストは言うかもしれない。ロシアの赤色テラーはロシア社会の複雑な対立を基本的な対立に具体化した。この性格は、埴谷雄高風のいいかたをすれば暗殺の醜態学とも言うべき日本の暗殺のかたちにくらべて、いっそうきわだつ。日本でもテロリズムは高くついた。歴史の流れをわきへそらすほど有効であった。「暗殺の美学」で埴谷雄高が「革命家の教義」を「金も命も名も要らぬものでなければ天下の大事はできない、という西郷隆盛の言葉と同じ根をもっているところの謂わば革命家必携といった心構え」と書いたとき、脳裡には維新前後の暗殺のかたちが浮んでいたとおもえる。おなじ近代国家の形成期であっても、維新前後の暗殺は、暗殺標的の下向体系でも、またその上昇体系でも解明できない。維新を準備し、指導した下士の「赤色」テロが、おなじ文脈のもとに維新後の改革にたいする白色テロに、なんとなく変わり、さらに未熟な自由民権運動への予防的テロをなんとなく結果した。日本においてはテロの激烈さは革命のだらしない曖昧さの表現であり、しかも恐るべきことだが、テロの性格が相当程度直接に革命およびその後の社会の性格を結定したのである。E・H・ノーマンはこう指適している。「恐怖手段は元来いたいていどの専制支配の国々にもみられ、わけても危機の時代にあつては、一つの風土病というべきものであるが、日本ではそれが独特の役割を演じてきたと思われる。(中略)西欧民主主義の政治環境だけしか知らぬ人々は、『暗殺は決して引合わない』とばかり安易に考えが

ちである。しかし、封建的伝統がまだ強い専制社会にあつては、個人的名譽に対する並はずれた崇拜が存在しており、暗殺についても欧米と同じ考え方が必ずしも一般におこなわれているとはかぎらない。」この見解をわれわれが納得できるのは、暗殺がつねに権力を人権化したところの標的にむけられるという一般的理解にもとづけば、暗殺の効果は、まさに個人的名譽と権力の体系が人格的にむすびついている身分制社会において最大であろうと想像できるからだ。残念なことに、われわれは幕末の武力斗争について、あまり資料と考察例をもっていない、大衆文学か、玄洋社系の資料か、あるいはノーマンかに例を見るくらいで、おそらくノーマンの「日本の兵士と農民」や「日本における近代国家の成立」なかんずく後者の補稿『維新前後における下士・浪人の戦術・組織ならびにその影響』をもって最上のものとするのではないだろうか。鞍馬天狗における高杉晋作と騎兵隊の逆推とか、やくざにおける農民のわたり職人と土木労働者への転化、座頭市における流産した武装下民、といった問題から幕末の武装斗争のイメージを抽出することは、この小稿全体より膨大な研究を必要とする。玄洋社については、日本右翼の母胎とみなされ、竹内好や判沢弘の研究を例外として、およそ人氣がない。E・H・ノーマンのみが今世紀の四〇年代に決定的ともいふべき研究をしたのは、彼が支配形態と被支配者の生活実体の関係をけつして忘れることのないすぐれた歴史家であったことにくわえて、連合側側面から見たからだろう。戦争下において自国の軍備と軍事理論を科学的批判的に追求することが日本の学者にゆるされるはずもなかったし、ノーマンにとっては日本軍の歴史的構造をその心臓部において解剖してみることがやらねばならぬ仕事だっ

たろう。さらにこの課題自体の困難が、ノーマンによって次のように指摘されている。下士および浪人の活動については「かれらの役割は謀略的性質のものであったために、その政治上の連絡や組織に関する記録はほとんど残っていないが、かれらの激越な行動は周知の事実であり、当時の日記や回想録の類を研究すれば、すくなくともその戦略の一端はうかがうことができる。」混乱したイデオロギーにもとづいてはいたが大平天国の乱が真の反封建斗争に発展したのとは逆に、強力な武力、綿密な策、たくみな工作、猛烈な行動力を有していたにもかかわらず、日本における下級武士の斗争はついに反封建の野に出ることはなかった。長期にわたって蓄積された反封建の思想が組織を必要とするにいたって整備されたものではなく、世界に類をみない巧妙な徳川の密偵制度のなから、それへの対抗者として出てきたものだからである。大胆不敵な行動と、その行動を決定した民族統一国家の必要にもかかわらず、その思想的表現は、幕末の下士にあつては必ずしも坂本竜馬の「藩論」に展開される立憲君主制ぐらゐにつく。倒幕に組織されたエネルギーの量と質、および策謀の技術を思想的に高める方向がいかぎり、政治的暗殺は対立者相互の姿を明確にさせるどころか、対立のかたちを複雑にするばかりである。

徳川幕府の打倒と明治新国家の建設の第一線にたったものは、薩長土肥などの藩閥を形成しえた下級武士である。かれらは藩規模の部分的な政治革命から着手する。藩主、諸大名は完備した密偵制度のために政務にたずさわる必要がなくなり、すくなくとも藩規模においては藩主、家老職、重役と上から下へ向う抑圧の体系が繁文礼辱的なものに卑小化され、下級武士の叛乱にとっては好条件をしつ

らえていた。下級武士の組織は塾にあらわれ、それは洋学、国学、徂徠学等を治めた人物を理論的指導者とした人格的結合による組織である。権力と人格とが密着している身分社会にあっては塾における結合は強固なものである。下士は塾をクーデタの拠点とする。その戦術は策謀と暗殺であり、この時にいたって武士の殺戮は政治的暗殺の性格を獲得したと言っている。下士階級は「領主をかれら自身の急進政策の三文判的存在にたらしめ」てクーデタによる自己の権力を合法化する。ここには暗殺の心理学も秘密学も美学もないであろう。しかし水戸藩の相互テロにはおそるべきものがあり、ノーマンはこう記述している。「水戸では急進派『正党』が一時権力を握ったが、やがて長期にわたる内戦で保守派『奸党』に敗れ、駆逐された。故クレメントは水戸藩の内訌について次のようにのべている。——この内紛による相互の殺戮は極めて凄惨なものであったから、水戸藩はまったく人材を失うにいたった。云々。」幕末に特殊な一勢力を力めたやくざは「やくざ考」で田村栄太郎の展開したように、権力の推移に極度に敏感であり（しかし、たとえば讃州の勤王博徒加島屋長次郎、号日柳燕石と高杉晋作の交遊が奇兵隊に博徒出身者の多いことの背景となっていることなど、敏感さはつねに博徒から権力へ向うものではないが）凄まじい殺戮のかたがちがあっても、政治的暗殺はついに起らなかった。百姓一揆による領主や代官への襲撃と殺害があったが、権力斗争の全局面が武士の手にあり、討幕斗争を藩規模から全国的な気運に拡大した論理「攘夷論」が、人民の憤懣を排外主義の方向にそらせる一方的作用を果した時に、農民による政治的暗殺は対立がなにとなしにのあいだにあるのかを明示し、したがって革命の性格を明確にする方向から断たれた

のである。この時から暗殺は武士同士の間でのみおこなわれるという特殊日本の性格がでる。このかぎりでは暗殺者即篡奪者の関係が成立するが、しかしそれは次の重要な二点で古典的な暗殺とはよべない。第一に篡奪者が複数の藩閥連合であること。第二に、かつて藩的規模の政治革命でしめたように、かれらは藩主をかつぎだして合法性をえたように、こんどは勤皇をかつぎだし、天皇をかれらの官判として公然性をえているのである。おどろくべき政治技術だ。叛乱を技術だとすれば、かれらは類をみない手練に達したのだ。またかれらはもっぱら反乱を技術として練磨することにより、自己の野望を達成する突破口を見出すようになった。なぜなら、下士は真の封建制打倒の勢力たる農民を、利用することこそ速慮はしなかったが、本質的に敵視していたからであり、そして革命的思想なしに革命的組織をつくりあげねばならなかったからである。革命の主体的要因を評価するならかれらは滅多矢鱈に主体的だったのであり、旋風のような農民一揆の連続、極度の寄生化「農民と豪商への二重の寄生化のために弛緩した幕府の強力、太平天国で火傷をした欧米列強という条件が都合よく重なっていないかぎり」「政治的策士を参謀本部とし、狂信的浪人を卒伍の兵士」とした組織が叛乱に勝利することはなかったろう。かれらが出現の当初から軍であり、武装強力であってもである。しかしかれらは情勢の判断とその利用、そして情勢への適応とその推進ということでは、するどい判断力と手腕とをもっていた。下士階級——倒幕の全国的連絡が整い、いわば職業革命家の相貌をもつにいたったかれらは、もはや志士と呼ぶ方がよいが——による叛乱の技術の特異性はここにはじまるのだ。

一、藩的、地方的倒幕運動を浪人の活動によって全国的な連絡網に一括すること。

一、攘夷論のマヌーバ的性格を利用しつくすこと。

一、徳川——天皇の頂点二重権力をつくりあげることに。

一、組織論と軍事理論をつねに密着させてはなさないこと。

一、暗殺手段を徹底的に利用すること。

志士の政策は以上の五項目につきまらう。攘夷論の不可解さは、そこに幕府および大藩の上層と、太平天国にこりた列強と、志士の運動上の、三者の利害が一致していたことにある。封建支配階級にとつて、排外分子の不満をなだめ、農民の注意を反封建斗争にむくことをそらせるうえで有効であった。列強にとつて、日本の支配層の政策である攘夷論程度のもものと妥協しておく方が、下からの民族自決論が日本の封建支配者を紛砕しついでごぼうぬきに自分たちを追ってくることにくらべて、わりのいいはなしであった。下士・浪人にとつて攘夷論は幕府の弱腰をたたき、もっとも古くからの、また激しい伝統的攘夷論者であったという自己の貴録をあげ、攘夷令の名目上の発令者天皇と直結して頂点二重権力にかけられ、自己の合法的活動の範囲をひろげる、という二重三重の利害によってもつきのさいわいだった。まるで攘夷トラスト内の過当生産競争走といったぐあいだ。とどのつまりは下士・浪人ももっともよく攘夷を利用しつくしたことによって、攘夷＝佐幕と攘夷＝倒幕の天秤は後者に傾くのである。「排外事件をひきおこしてその結果報復される危険を賭してまでも、西洋の兵器と戦術の優越を満足ゆくまで試験したが、このことは幕府との斗争においてかれらのためにどれだけ役立ったかも知れない」とノーマンはこの事情を説明してい

る。志士は京都に集結し、公卿との連絡をおわり、自藩にかえる。この過程を、党による斗争から大衆斗争への転位が陰蔽されてあらわれたものだ、と説明していかぬかも知れない。京において志士の党と幕府方の強力、所司代や新選組とのあいだに、激烈な斗争と暗殺がくり返されたのは周知の事実であり、またここにおいて、党内テロと言ってよいようなものが、長州藩と土佐藩のあいだにひきおこされている。しかしそれはわれわれがロシアの事情で理解したものとは性格を異にし、一面主導権あらそいの相をおび、他面スターリンの各個撃破戦術をおもわせる相をもっている。はっきりした思想的、政策的な相違点をもたぬままAと結んでAを斬り、Bと結んでBを斬る。Aを斬った後に暗殺の大義がやってくる。公然たる対立はなく、思想的・政治的対立にもとめるべきところを、天誅、奸賊といった超越的な名目にすりかえられる。暗殺と思想の関係が逆なのである。死体はさらしものにされるが思想はかくされる。しかし問題はこうなのだ。政治的暗殺の論理をなさない政治的暗殺が大量におこなわれて、それを怪しまない武士道の世界において、日本の近代国家形成が指導されたこと、近代国家の権力体系と権力論が初発の地点において武士道と纏着した歪をもっていること、したがってテロもつねに反動を助成する方向に作用すること。こうした政治的暗殺の奇型は、他方軍事理論の奇型のなかにバランスをとっている。志士は倒幕を陰謀の段階から大衆的な軍事行動の段階に深めてはたすべく、自藩に戻る。薩摩は自藩の資源を開発すべく上から、一国的な規模で、商業的に資本主義化を強化し、長州は下関要塞の土木工事を中心として、一国的な規模で、工業的に自藩の資本主義的活力を上からひきたす。かれらは倒幕のための軍事的なプ

ルとして、ことに長州の奇兵隊がそうであるが、農民に目をつける。奇兵隊については多くの論述があるのでくりかえさないが、よくするにそれは急進勢力の極端値ではあったが、国民軍の原型ということはできない。奇兵隊という最良の歪形態を例にしても、農民による反封建斗争と本質的には敵対している下士階級の性格と、また農民の叛乱を利用しなければ討幕運動、権力斗争に勝利しえないという下士の判断のジレンマの妥協点をでるものではなかった、と指摘すればここでは十分である。維新は武士的な権力斗争を経て達成された。しかし武士の指導のもとにおこなわれた維新のその後の発展が、寄生的な封建的特権階級としての武士の癡絶をもたらしたこともたしかだ。明治維新にたいする最初の反動は士族反対派としてあらわれる。苛烈なテロはふたたびあらわれる。しかし士族反対派は、極度に地方的で後進的な神風連をのぞいて、西郷隆盛の系統と、後の自由民権派にひきつがれる士佐立志社としてあらわれ、いずれも藩閥政府内に席をしめ、いずれが開明的であり反動的であるかもさだかではないのであるから、ここにおいても、苛烈なテロはまた曖昧なテロである。(士族反対派の斗争方式は暗殺だけではなない。一方に、西郷——征韓論——西南の叛乱——玄洋社とたどる系譜があり、他方に立志社——自由民権とたどる系譜がある。しかしこの問題に本稿はふれない。)むしろテロリズムはその曖昧さの頂点に達した。開明的Aと反動的Bの符号を相互にとりかえることができ、開明的と反動的との符号をどちらがつけても、民衆の基部にはなんの変化も生じない時代の暗殺は、つねに曖昧であり、反動的の進行をうながすことになる。このようにわれわれは一般的に判断していいかも知れない。この時代のテロが横井小楠、広沢真臣、大村

益次郎といった、大胆な、個性の強い人物にむけられてゆく傾向に注意しなければならない。日本におけるこの期の暗殺が高つき、暗殺者と権力者には安くついた理由は、ノーマンの次の見解にあきらかにされている。「暗殺者が『誠意』をもって事をおこなったと考えられる場合には、犠牲者の才能を失ったことが国家にとっていかに損失であるか……は考えられなかった。(中略)だいたいにおいて犯行の自認の仕方いかんに基づいてその事件全体が判断された。(中略)犠牲者と暗殺者の政策の対立が悲劇的紛争を生じたというように、事件全体が高い水準にひきあげられた。」ように浪花節的ひとくきりでケリがつく。ますます思想は不在になっている。かつては天誅にすりかえられたものさえないから、裁判官が「高い水準」をつくってくれる。暗殺の無思想化の極である。ここには煮詰められた私斗の論理はおろか、テロリストの仁義さえない。これで武士道とはわらわせる。万引ひとつして悶々としている、その日ぐらしのわが戦後世代の方がよほど士性骨がすわっているのだ。しかしこの時代の暗殺はすでに予防的暗殺という新性格をおびている。「自由主義的改革の戦士たちがまだ時機のいたらぬうちに暗殺されたために、犯人が適宜処罰されたにもかかわらず」、暗殺は安くつき、反動は大いにもうけたのである。

にこうある。「長生仕嶋、金儲け鯛、手柄が立鯛、名譽が得鯛」を捨てろ。「死、貧、名の上の觀念を解脱して、命は必要次第に投出す、貧乏は何程にしても構わぬ、縁の下の方持をして、悪名計りを取っても、少しも不平がなく、心中常に爽然の感が漂うて春風俚俗の中に徜徉するが如き境涯にならねばならぬ。」とか「第一皇上の御為、第二は国土人民の為、第三は朝鮮の始末と鉤り代へである、此の三つの為なら何時でも現在の生命を捨てて、其以外は決して死なぬ。」とか「国事は損して、悪名を取って、身を粉に砕き、揚句の果に死んで仕舞ふ、夫が大成功であるから、普通常識の考えからは大損である。」っての、イイセン行ってるだろ。日本革命の土着原人歴史的大疎外者——玄洋社の杉山茂丸——夢野久作父子、この北一輝なんぞ屁の河童の思想大髄脈をはってほってほりまくるのはおあとの楽しみ、だしおしみ、舞台を改めしたる「魔党試論」に期待していただく。

われわれは暗殺という主題の成立しない下民の世界からネチャーエフがでてきたのだということに注意しよう。赤色テラーの私斗の論理でイワノフ殺しは切れるか? 上向にしろ下向にしろ、暗殺の体系の文脈で解くには彼の顔はあまりにも悪魔的だ。われわれは一八七六年のデイチによるキエフ叛逆者党内のスパイ殺しからはじまる赤色テロの内的論理を解明した。しかし一八六八年に維新をむかえる日本における権力斗争と暗殺のかたちが、徹頭徹尾、武士の内紛として進行したために、統一的、原理的に解くことをしえなかった。そしていま、明治維新の翌年のイワノフ殺しに直面しているのであり、下民による革命家の暗殺またはその逆という主題が、謎としてのこっているのである。ネチャーエフは公斗に転化しえない私

斗の世界を、自己の根源的な感性の次元、すなわち階級の次元としてゆずりわたすことはなかったろうし、そこからでてきたものは暗殺の体系ではなくして、逆説的にきこえるだろうが、潜在的弾圧の体系ではなかったのか。ここを解かないかぎり、ネチャーエフに關するあらゆる政治的接近は不可能事につく。われわれはネチャーエフの下民的な組織性を見てきたが、いま下民の権力像におよばねばならぬ。それはたぶん、俺が自己の方法に名づけるらっきょうの皮むき理論に近いものだ。搾取——被搾取を右手の爪とし、権力——非権力の軸を左手の爪として、社会の上層から下層へ向ってらっきょうの皮をむく。皮をむきたったところかららっきょうの核が純粹に被搾取にして非権力の、やられっぱなしの純粹プロレタリアがでてくるか。否だ。われわれはスラムにたどりつくだろう。そこに空想的企業とでもいうものを見いだす。売血者の血をゴム管でしばらく一時的に血を濃くするしぼり屋だとか、風太郎をかきあつめて奴隷労働の利ザヤをとる手配師だとか。われわれの生活様態は下民である。公的機関である職安をだしぬき、ときには官憲とわたりあい、冒險的な日々を送っている。一面においてかれらは被搾取——非権力の軸をもっている。だがかれらは搾取——権力を主軸としている。公的機関、公権力と熾烈にあらそいながらそれを補完している。これと、さらにこの空想的企業に吸われている連中との關係に、搾取の軸と権力の軸があるのだ。しかし、相互に反転する搾取と権力の軸が、下民において明確に搾取——権力の支配の方向をしめすことは、たまたま一般市民に対する犯罪としてあらわれたり、スト破りに使われたりするときにかきあらわれているのが、この世界の特色だ。権力と搾取とは売血者や風太郎同士のあいだに反転しあい、

外にあらわれることはほとんどない。支配——被支配の關係は詩人のとんでもない空想力をもつてしてもおもしろくない下民の空想的企業にも作用しており、一見アナキそのものの世界が容易に権力組織まるだしにわかる。この世界で単純にやったのか、やられたのかと問うことは、これは強姦であろうか、和姦であろうかと考えるのとおなじようにばかっている。傍観者は階級社会とはいかに深刻なものであり、どこまでいっても階級社会は階級社会だと思ひ知らされるだけでたくさんだ。階級社会においてはどんな一部分も階級社会である。一部分はまた全体を一部分ににせるのである。こうして権力——非権力、搾取——非搾取の軸が上から下へ、下から上へ、向かっているという理解を得る。やりかたは、やられかたにあわせて、やるのだ。かくされたこの關係を極度に強調して、権力と搾取の下から上へ向う軸を明示的だとするのは誤謬だが、この誤謬の逆、すなわち上が範を垂れ下これにならうという儒教的錯倒をはなれば、階級社会にあっては、ひとつの部分的局面的な被支配は、全体的な支配——被支配の文脈のなかで、それぞれの歴史的、時代的な制約をもつたところの支配のかたちをよびおこすのである。支配——被支配が上から下へ流出するという明示的な姿は、吉本隆明風にいえば、支配を下から上へ支えるかくされた回路をうつしたす鏡である。日本社会のレーニンの理解をしめた論文「ナシヨナリズム解説」で吉本隆明が強調した点はこうである。「大衆の現実上の体験思想から、ふたたび生活体験へくりかえされてゆく無意識的な『ナシヨナリズム』は、もっともよくその鏡を支配者の思想と支配の様式のなかに見出される。歴史のどのような時代でも、支配

者が支配する方法と様式は、大衆の即自体験と体験思想を逆さにもつて、大衆を抑圧する強力とすることである。」この種のらっきょうの皮むきを変形すれば、ロシアのキリストとかピョートル大帝の再現というぐあいに、スタヴローギンとして、ドストエフスキーにうつしたされたネチャエフの水面下の大陸を解くことができる。支配——被支配の關係に沿って、ブルジョワ民主主義は、下から上へという回路の存在を部分的にあきらかにしたが、思想的繼承の面ではロシアの自由主義者の極端形態をでなかつたテロリストたちが——しかしこれらの展望は議会民主主義ではなくプロレタリア独裁の門口まできていた——権力の下から上への回路については、密告者の殺害から露帝の殺害までを幅を歩んだにすぎなかつたことをわれわれはみた。しかし下民の子ネチャエフは、露帝から下民にいたる権力の下向が、下民から露帝にいたる権力の委任の裏の体系をもつことを知っていたにちがいない。ネチャエフはイワノフをテロリズムの原理ではなく、直接に、理論的媒介なしに、殺したにちがいない。彼は牢獄のなかで確実な成長をとげた。（しかし、松田政男のように「牢獄の哲学」をあまり高く評価することに俺は賛成できない。入牢はあまりおすすめできない。サド、パプーフ、ブランキ、ドストエフスキー、ネチャエフといった人々は牢獄で思想形成をとげ、トロツキーにしても最初の永久革命論「総括と展望」を独房で書きあげ、大杉栄もその一人であるが、かれらはみな異常な資質の人間なのである。それよりもわれわれは牢獄でつぶれていった数多くの思想家や革命家におもいをよせて、ベッドでも便所でも物を考える習慣を身につけた方がいい。ナロードニキのように農民を裸でふるえているみなし児のように純化もせず、テロリストのよ

うに抑圧機關を諸悪の根源とみなし、抑圧機關にガタがきた時に「人民の力の発見は可能になり」、比較的すんなり正義の時代がやってくるとは彼は考えなかつた。かつて彼は農民の素朴な露帝メシアニズムに、農民の原罪をさえ見ていただろう。十数年間の独房生活で彼の権力論はたぶん怪物のように巨大化し、ここでもネチャエフ一流のさかさまにひっぱたくという宿命的な戦術から、俺がツァーリになるという結論に達したにちがいない。それをしめすいくつかの証拠がある。まず獄中から露帝にだした、傍若無人な、破廉恥犯としてひくくつきながらロシアにくると早々に政治犯となる寸法は「八千万の長たる皇帝」のやるまねじゃねえな、え、おめえとといった内容の手紙がある。またフィグネルは次のように記録している。「解放者達は大きな制服に勲章を胸一杯つけて現われる。彼等はアレクサンドル二世の退位と王位継承者の即位、それに新皇帝による囚人解放令を告げねばならない。」これはネチャエフの脱獄プランのうちのひとつだ。また、ネチャエフに改宗させられた獄卒のひとりはいこう言った「あの人に何か言いつけられて、ことわれるものかどうか、自分でためしてみんなね。あの人がじろりと見りゃあ、それでお願いします。」

これはなにを意味しているか？ ネチャエフという男の真の恐ろしさを、である。われわれの通念では警官と獄卒を寝返らせることは不可能である。武装反乱の瞬間に警官隊は行方不明になる。その理由は植谷雄高によって次のように説明されている。「まず第一に、武器の保持者でない彼等に双方から決定的な価値が認められぬからであり、第二には、日頃から人民に接触をもたぬ軍隊とまったく反対に、近いものが激しく憎み合つて、遠いものが却って親しみ

合うという政治の原理がきびしく働くからである。」（六月の八革命なき革命）多少補足すれば、民衆への警官の憎悪は、かれらの低賃金によってさえられている。また日常民衆と接触しているにもかかわらず、かれらは大衆という概念がわからないのだ。かれらには大衆が犯罪者になったときはじめて意味を嗅ぎわけられるのだ。ようするに支配者は警官を経済的にも心理的にも、犬のような卑屈さに置いて、民衆から切りはなしておく。一方獄卒は——帝制ロシアにおいてもそうだったろうように——ほとんどが善意の人である。監獄制度の当事者たちは、階位が上になるにしたがつて、いやな奴になり、強圧的で、陰険で、野蠻になるというおおよそ非教養主義的な順列をもっている。囚人と直接ふれあう機構の末端においては、仇同士が和解すれば血盟が生じるが、はじめから「和解」しているものは真に共同しえないという論理がはたらいている。警察、獄卒のいずれにせよ革命家にとっては困った連中なのだ。獄卒を社会主義者にするより、社会主義者を泥棒にすることのほうがはるかにやさしい。ネチャエフが獄卒を改宗させ、自分の第五列に組織しなおしたことは、だから、通りいっぺんな議論によつたのではないことがあきらかである。彼は官憲の権力像よりも、より強く、強烈な権力像を下民の実存からとりだして、獄卒を上から組織したにちがいない。革命の勝利に先んじて、民衆を下から組織し権力側の人間を上から組織する。まだだれも試みたことのないこの領域の可能性があるのだ、とネチャエフは暗示しているかに見える。かつて逆革命の方程式をしめしてみせた彼は、いま逆権力の方程式を提示してみせたのである。農民の潜在的な露帝崇拜がなくなつたとき、自己＝革命から自己＝国家のネチャエフ方式は、エカテリーナ女

帝の夫をなつたプガチョフ的アナクロニズムといい勝負になるが、しかし、すくなくとも、ここには日本の官憲の転向のテクニク、ゲシュタボの拷問のテクニク、FBIのGメンのテクニク、オフラナのスパイのテクニクのはるか上をゆく革命徒刑囚のテクニクがあつたはずである。しかし農民、雑階級下民の原罪から発して、原罪的な自己の逆理論に達したネチャーエフは、自分が絶望であることをネチャーエフ救出の希望が生じた時にさへ認識し、おそらくこうつぶやいたにちがいない。「ふん、俺がすぐわれてたまるか！」

セルゲイ・ネチャーエフの絶対値をあきらかにする稿はこれひとまずおわった。

1964.12.20

(五九ページよりつづく)

遭遇したかもしれない。その果に、「女人芸術」の誌上にくりかえしたような生硬な革命論議を展開したとしても、少くとも、藤森の作品のなかにヒューマニズムの問題を探りつつあつた八木秋子の疑問と同質の文学の問題が、論争のどこかに時に応じて顔を出し、まったく文学の問題から離れてしまうようなことはなかったかもしれない。この文芸時評の冒頭の八木の詩のような言葉は、その遺憾をくりかえし、同じ疑問を提出しつつけるものようである。

この、さらに五ヶ月後の同誌三周年記念号に、中島幸子が誇らげに書いている。

「現在の『女人芸術』の指導的理論が全体的にマルクス・レーニン主義に基調をおいていることは明白に断定し得ない。しかし吾

々は女人芸術の構成員が社会主義的意識を持合せていることを誰が否定し得よう。『女人芸術』は今種々なる方向の思想を網羅している。サンジカリスト、アナキスト、マルキスト、ニヒリスト等々……然し最近の急激な発展を見よ、客観的情勢の激化と相まって、マルクス主義に規準を置く潮流がたかまると共に、『女人芸術』の陣営内部の意識も漸次統一化されて行く傾向を示している。」

事態はまさにそのように、やがてこの雑誌の全誌面を厚く当時のマルクス主義プロレタリア文学の雰囲気覆い、同年九月号は、『プロフィンテルン大会と赤色労働組合運動』（岡田竜子）、「××××は婦人労働者のために如何に戦うか」（佐野文子）の記事によって発売禁止にまでなった。

一方、「女人芸術」から脱退したということではなかったが、アナキズムの側も高群逸枝、望月百合子、八木秋子、松本正枝、伊福部敬子その他、平塚らいてう等も同人に加わって、別に「婦人戦線」という、おそらくアナキズム思想上はじめての女性だけの集団とその機関誌の発行を見ることがなった。（1963・1・8～16）

×

×

×

×

×

×